

続 櫻の木の下で (31)

阿木津 英



七月十日、岡井隆さん（尊敬をこめて、いつものようにこう呼ばせていただく）が天に召された。

自分の仕事を見てほしいと思う歌人が、身めぐりからつぎつぎになくなる。岡井さんの才質はまれに見るもので、塚本邦雄、玉城徹、岡井隆、この三人は戦後歌壇が得た大きな収穫であるだろう。以後は痩せ細るばかりだ。作歌の始めからこのような歌人たちに見まもられながら過ごしてきたわたしたち世代は恵まれていた。

わたしにもつとも縁の遠かったのは塚本邦雄だが、それでも「未来」誌上に『天の鴉片』書評をいただいている。依頼してくださったのは、岡井隆である。第二歌集は難しいものだが数頁ひらいて読んでいくうちに、意外にも第一歌集を読んだときと同じ気持ちに戻り得た、というような意味のこと

を書いたくだりが冒頭にあつて、とてもうれしかった。

その半年ほど前、京都で春のシンポジウムを女性たちで開催して大いに気炎をあげたものだが、最後に感想を求められた塚本さんは、万葉集の歌「いづくにか船泊すらむ安礼の崎漕ぎたみゆきし棚無し小舟」をあげられた。心中、こういう女性たちの言挙げには白々しくもあきれつつ苦々しいものを感じていたことがわかる。そして、わたしの紫木蓮の歌をかかげ、こういうものこそは堂々としたデモンストレーションの歌だと、確か言われたと記憶する。痛烈、かつ婉曲にわたしはいさめられていたわけだ。

ぼんやりなわたしはそういう批評にあまり堪えもしなかつたが、第二歌集をひらいて第一歌集を読んだときと同じ気持ちになれたという言葉には深く感ずるところがあつた。大きな歌人というものは鑑賞の幅が広いばかりでなく、どういふところに感応するのかわかることを知った。

*

ホメロスを読まばや春の潮騒のとどろく窓ゆひかりあつめて

岡井さんの韻律には、ギリシヤ神話の英雄的りりしさが通つていて、そこがわたしはたいへん好きであつた。西脇順三郎の『Ambavaria』を初めて復刻版で読んだとき夢になつたが、それと似た感触である。

しかし、英雄というのは、挫折し、廃れてこそその英雄であって、そこに文学性があらわれる。古来、讒言につぐ讒言で過酷な政争を繰り返した中国王朝の歴史でも、「文学が讒言を被ったとされる側から生み出されているのは確かだ」（浅見洋二『文選』第二巻）。

そういう英雄性を脱いで、地上的な存在になっていったのが一九九〇年代のことであった。

*

ある日、明治神宮主催の短歌大会で廊下ですれ違っているうとしたとき、あ、とわたしを呼び止めて、

「市場経済と芸術の特集、面白かったよ」

と、ひとこと言ってくれたことがある。「あまだむ」をきちんと読んでくれているばかりか、あのような特集の意義をわかってくれる、やはり岡井さんだと、とてもうれしかった。

また、別の時、「八雁」で毎号付録のように掲載している石田比呂志資料集について感想を述べられた。一九六〇年前後の「未来」を紹介していた頃だ。「あんなところまで読んで下さっているんですか」と驚くと、「僕の名前も出ているからね」などと言われた。たしか、その頃の「未来」や近藤芳美についての秘話を教えてもらったような気がする。そんな事情はぜひ書き残しておいてください、と言ったことだが、わたし自身がすっかり忘れてしまっている。

*

そうそう、こんなこともあった。「未来」の編集に加わっていたころ、「歌の批評について」というテーマで、樋口寛さんを司会に、玉城徹と岡井隆の対談を企画したことがあった。「ルノワール」かどこかの個室でやったのだと思う。その日、企画者のわたしが大遅刻をして間の悪い思いをしなが、忘れられない一言は、そのテープ起こしのあとの編集を見てもらったときのこと。

「京都学派のところは全部削ったんだね。あそこがいちばん面白いところだったのに」

いかにも残念そうに言われた。玉城さんに「京都学派って何だったのでしょね」と岡井さんが話を切り出したその部分は、戦後生れというばかりでなく無学のわたしには関心をもてなかった。歌の批評とは関係ない流れだからとぼつさり省略したのだが、「しまった！」と思った。

あの痛い思いは、のちのちまでおりに触れては蘇った。そのあと、編集しなおしたのかどうか。余りの部分の原稿をそのまま保存してあるのが二、三年前出てきて、タイプしてみただが、「未来」誌面と照合してみなければよくわからない。

*

このたび、『前衛歌人と呼ばれるまで 一歌人の回想』(なからみ書房)を読み返す機会があった。一九九六年刊、地上的な存在になって、それまでの岡井隆信奉者から「変節」を糾弾された時期である。

また少し話はそれるが、石田比呂志はそういうときの岡井隆に寄り添って力づけた。地上の泥にまみれて生きてきた石田比呂志の本音による励ましは、たんに私利私欲から出るものとはことなるニュアンスがあっただろう。

石田には四面楚歌になっている者にそつと寄り添っていくところがあつた。「未来」を出て行かざるを得なくなつた田井安曇に対しても、そうであつた。

さて、その『前衛歌人と呼ばれるまで』だが、そういう時期に自らの歌人としての出立を振り返つた書で、思う以上に誠実な、自らの観察の書であることに感嘆した。ここまで、自分の歌に対して明晰な観察のできる人はそうはいない。

本書は、第一歌集『斉唱』の自解注釈書でもあるが、また一九九〇年代半ばという歌壇が大きく変わり始めたころの状況も反映している。

冒頭の「歌の始まり」の章では、小中学校で漢詩文や文語文の韻律にどれくらい触れるかが「短歌といふ、文語を基本とする定型の骨子を自分のものにする速度を決める」、しかし俵万智・加藤治郎以後は少々違うだろうと述べて、言う。

戦後の国語教育は、伝統文化の排除と啓蒙性の強化といふ点で、アメリカ占領軍の文化政策と同調したのだったが、その結果が、今の、実になめらかに〈話しかけ言葉〉（話し言葉ではなく話しかけ言葉）を、短歌とドッキングさせ

る風潮を生んだ。その代り、失つたものも大きい。

今の時点から振り返ってみればよくわかるのだが、一九九〇年代は、伝統文化の排除が完成してゆくにつれて、形骸的な伝統文化尊重の動きがおもてに現れ始めた時代である。〈話しかけ言葉〉短歌が主流となっていく過程で「失つたもの」は何だったのか。岡井さんはどう考えていたのか。これはぜひ聞いておきたかつたことの一つである。

それから、旧制高校の頃の歌を中井英夫が『岡井隆全歌集』に見て「稚純」と評してくれたことを記す、つぎのようなくだりもある。中井英夫は、岡井隆の前衛短歌運動の頃の歌を嫌つていた。名伯楽であつた中井英夫に評価されなかつたことは、岡井隆にとつてずいぶん痛手であつただろう。

その中井さんが「稚純」と言つたのである。この評価は何か今になると判る気がする。それは、

事のむなしさをしきりに追ひ言ふ友と切るとき言葉交して別れぬ

のやうな、字余りを許した、おしやべりな歌と比べてみれば判る。稚純は、短歌といふ詩型の持つ〈口ごもりの美〉に忠実なところから生まれる。饒舌は危険なのだ。しかし、わたしは、土屋文明の歌、近藤芳美の歌に親炙するうちに、おのづからおしやべり歌の方向へ、流出して行つた。

自らの歌を、土屋文明、近藤芳美の系統をひく「おしやべり歌」としてはつきり認識していたのだった。岡井隆の歌の本質は土屋文明の系統なのに、どうして斎藤茂吉ばかりを書くのだろうと、つねづねわたしは疑問に思っていた。だからこそその茂吉研究であり、塚本短歌からの摂取でもあった……と書きながらふと疑問が兆す。岡井さんは自己の歌の本質を「おしやべり歌」とはたして認識していただろうか。

中井英夫が「稚純」と評した歌は、次のようなものである。

街上に白墨の矢がのこりたりいかなる意志を伝へむとせ

し

何心なく灯を消す夜と思ひつつかなしみながら消す夜
半とあり

〈口ごもりの美〉の問題もあるうが、「純」を十八歳の岡井の歌に中井は見出したのではないか。

*

本書を読んで、あらためて思うことのもう一つは、岡井さんは手技——実地に手を動かしてみること——がころから好きな人だった、ということだ。芸術するものはどんなときでも、音楽をするものは音を動かし、絵を描くものは絵筆をもって線を引き色を置き、言語芸術をするものは言葉を組み合わせて、そこにかたちを与えてみる。頭で考えるのではなく、手を動かし、手で考えるのだ。手が練れてくると、風合いが生れる。文体に風合いをもつ人はまれである。

わたしは岡井さんの晩年では詩の方が好きで、詩人の詩にはない、言葉の風合いがあった。

短歌の負つてゐる方法上の問題は、この、「事実」そのまま〈事実〉ばなれとの谷間にある。このことを概念としてではなく、自分の体験として擷んでゆくことが、歌人の修業のアルファでありオメガなのだ。「事実と虚構の間」

こういうくだりにも、岡井隆がつねに手を動かしつつづけてきた歌人であることがうかがわれる。

だが、一九九〇年代半ばから台頭して現在は歌壇の主流とさえ言われている近代口語による短歌では、「事実」そのまま〈事実〉ばなれとの谷間「なんて、問題にすらならないのである。そういう短歌の台頭を見ながら、そこで大きく失われるものを懸念して、みずからの基づいてきた「写実派の手法」を開陳することが、本書の目的の一つでもあった。遠慮しながらの差し出し方だが、それは「あとがき」を読めばはつきりとわかる。

玉城徹は、この「写実派の手法」のある部分に根本的な懐疑を提出した歌人である。その視点から塚本邦雄を評価した。塚本・玉城・岡井のトライアングル、この三元連立方程式をまっとうに受けとめ、明晰に見透して解くことでしか、短歌の未来はないように思われる。